# 魏晋南北朝史のいま

総論 魏晋南北朝史のいま

I 政治

曹丕 - 三分された日輪の時代

晋恵帝賈皇后の実像

赫連勃勃 - 「五胡十六国」史への省察を起点として

陳の武帝とその時代

李沖

北周武帝の華北統一

それぞれの「正義」



 $\prod$ 

魏晋期の儒教

南北朝の雅楽整備における『周礼』 の新解釈について

南朝仏教と社会―王法と仏法の関係

北朝期における「邑義」の諸相 国境地域における仏教と人々

山中道館の興起



徐 冲(板橋暁子・訳)

27

田中靖彦

窪添慶文

4

小池直子

18

岡部毅史

松下憲一 会田大輔

堀内淳一

70 59 49 38

倉本尚徳

北村一仁

斌(田熊敬之・訳)

史部の成立

書法史における刻法・刻派という新たな視座

北魏墓誌を中心に

澤田雅弘

永田拓治

143 132

鄴城に見る都城制の転換

 $\prod$ 

国都

•

都城

建康とその都市空間

魏晋南北朝の長安

同時代人のみた北魏平城

北魏洛陽城 住民はいかに統治され、居住したか

統万城

「蜀都」とその社会-成都 二二二一三四七年

―後漢から五涼時代にかける姑臧城の変遷

辺境都市から王都へ

出土資料から見た新 い世界

竹簡の製作と使用

- 長沙走馬楼三国呉簡の整理作業で得た知見から

IV

呉簡吏民簿と家族・女性 走馬楼呉簡からみる三国呉の郷村把握システム

魏晋時代の壁画

北朝の墓誌文化 北魏後期の門閥制



佐川英治

小尾孝夫 内田昌功 岡田和一郎

226 215 205 194 184 174 163 153

市来弘志 角山典幸

新津健一郎

金

平(石原遼平

鷲尾祐子 安部聡一郎

289 278 268 257 247 237

梶山智史 三﨑良章

asia\_魏晋南北朝史のいま\_目次.indd すべてのページ

# 魏晋南北朝史のいま

#### 窪添慶文

ぶ」立場でなくても、いわば「まま子」的なイメージを付与される。 魏晋南北朝時代は谷間の時代というイメージがある。中国最初の統一帝国秦漢と第二の統一帝国隋唐の間に挟 た分裂の時代であることは確かであるとしても、 それが強調されすぎて、「大一統」つまり「一統をたっと

な理由による。 方を伝えるよい機会ではないか。 が多くなり、研究対象も多岐にわたり、新しい資料も次々に出現している。魏晋南北朝時代史研究の現在のあり が十分に伝えられていなかったことによるのではないか。さらに近年は魏晋南北朝時代を対象とする若い研究者 でも魏晋南北朝時代はほんとうに「影の薄い」時代だったのだろうか。そうではないだろう。それはその魅力 勉誠出版から打診があった時、 即座にお受けしようと考えたのは、 以上のよう

ではないか。そこで選んだのが、三国時代の最初の君主である魏の文帝曹丕、 非にとお願いした経緯がある)、南朝ではそれ以前の諸王朝とは異なるあり方を示した陳の武帝、 き金となったと言える恵帝賈皇后、 物を取り上げ、その経歴や活動、 かつそれらの国が次々と交替した当該時代において、単にそれぞれの国を扱っては概説に流れてしまう。 ひとつの時代を取り上げる場合、政治史でまず大きな流れをつかむことが常道であるが、 思想を追いつつ、それぞれの時期の政権のもつ意義を明らかにした方がよいの 五胡十六国からは北魏に敗れた夏皇帝の赫連勃勃(口頭での発表を拝聴し、 西晋の滅亡につながる大内乱の引 複数の国が並立し、 北魏ではよく知ら 故に人

である。そして複数政権が並立する時代においては、自らの正統性を各国は主張せざるを得ないわけであるから、 その状況を述べる論をおいて結びとする。これを第一部とする。 れた孝文帝の改革を支えた漢人官僚李沖、そして隋の統一国家を導くことになる北周の武帝というラインアップ

書法、刻法についての知識を有しないので、特に執筆をお願いした。以上を第二部とする。 学術面では漢籍分類でおなじみの「史部」の成立の問題を論じていただく。書文化において当該時代のもつ意義 儀礼は近年強い関心が注がれる分野であるが、礼楽に視点を絞って政治・政治思想との関わりを扱いたいと考え、 道館を通じて道士と社会との関係を論じていただけるよう(これも口頭の発表を拝聴して)お願いすることとした。 時代であるが、南朝サイドからが大きな問題とされた王法と仏法の関係、北朝では仏教信徒の集団である邑義の は周知の如くであるが、北朝で盛行した墓誌の刻法の問題はほとんど知られていない。筆者は墓誌を利用するが、 もつ諸側面を扱いたいと考えた。やはりこの時代に宗教としての姿を整える道教については、 動きは基本として押さえねばならない。後漢代に中国に伝えられた仏教が中国社会に定着するに至ったのもこの 思想面における魏晋南北朝時代は重要である。まず漢代に国教化し一尊の状況にあった儒教に起こった新し 山中に建設された

城、北涼の姑臧を取り上げる。多彩な都城像が得られるはずである。 叙上の観点からして、鄴、 どが利用できるようになり周辺環境の把握が進んだことによるが、日本の都城の源を探る場合に、先行する時期 に多数の国が存在した故に、ほかにも多数の国都となった都城がある。 の中国の都城の理解が必要であるという事情も後押ししている。よって都城のみで第三部を構成することとした。 近年魏晋南北朝時代の都城についての関心が高い。それは都城址の学術調査が進行していること、衛星写真な 建康、長安は欠かせないし、北魏前期の都であった平城もそれに準じる。 その中で、三国蜀の成都、 赫連夏の統万 さら

敦煌・トルファン文書のような紙による第一次史料も極めて限られる。 近年中国では出土資料の紹介が相次ぐ。 出土資料がもつ意味は非常に大きい。魏晋南北朝時代は簡牘資料はごく僅かしか知られず、 戦国秦漢時代史は出土簡牘なくしては語れないと言えば言い過ぎかも そのような状況下、 二十年ほど前に長沙 唐代の

魏晋南北朝史のいま

総論

論

走馬楼三国呉簡が発見され、その後も小規模ながら簡牘出土が報告されて、それを用いる研究が相次いでいる。

る。 た。これも長沙で行われたシンポジウムにおける報告を拝聴した結果である。他方、 復元する方法を示しつつ家族・女性の問題を扱った一文を載せる。いずれも文献資料のみでは扱えない問題であ 多方面にわたる論題が可能であるが、 また出土簡牘の整理・保存にあたった立場から竹簡の製作にかかわる問題を扱う一文をも頂戴することにし 呉簡を用いた呉政権の郷村把握のシステムを解明した一文と一連の文書を 相次ぐ新出報告や図録本の

けるかもしれない。この点はお詫びしたい。 否めない。絵画や造像など文化面で取り上げるべき項目も残されている。 都城を大項目に立てたことによるところが大きいが、 究状況を勘案して取り上げないこととした。また、東晋南朝に関わる論題が少ない。これは建康しか対象がない 史ではない、という雰囲気があった。 以上、 経済史関係がないことに違和感を覚える読者がおられるであろう。筆者の若い頃には社会経済史でなけれ 企画立案の狙いを述べた。幸いに依頼申し上げた皆様には執筆を快諾していただけた。気鋭の方々によ しかし研究状況は大きく変わっている。まことに残念であるが、 編集を担当した筆者の関心の偏りによる側面もあることは バランスを欠いているとのお叱りを受 近年の研

の報告も多くなっているので、それについて論じた一文をいただく。

刊行によって、利用できる墓誌の数が多くなり

を論じた一文と、墓誌を利用することによってできる研究の一面を示す一文を載せる。また墓室に描かれた壁画

以上を第四部とする。

ば

それらを用いた研究も増えている。

故に墓誌全体に関わる問題

り魏晋南北朝時代の魅力が十分に伝えられると信じる次第である。

総論

# 三分された日輪の時代

#### 田中靖彦

の萌芽」(『東方学』一一九、二〇一〇年)などがある。二〇一〇 二〇一二年)、「澶淵の盟と曹操祭祀――真宗朝における「正統」 田塾大学紀要』四七、二〇一五年)、『後漢書』荀彧伝について 志像』(研文出版、二〇一五年)、「三国論の過渡期と蘇軾」(『津 学史、中国地域文化研究。主な著書・論文に『中国知識人の三国

- 『三国志』との比較を中心に」(『恵泉女学園大学紀要』二四

たなか・やすひこ―

恵泉女学園大学特任准教授。専門は中国史

年、第二九回東方学会賞。

事績について、政治史的側面を中心に振り返る。 な言説と現代の研究の両面から追い、多方面にわたる彼の 短いながら激動の人生を駆け抜けた曹丕の生涯を、歴史的 を制定するなど、彼が果たした歴史的役割は小さくない。 魏王朝の初代皇帝・曹丕。漢魏革命を達成し、九品官人法

#### はじめに

曹丕(一八七―二二六)である。同話が曹丕を天下三分を象徴 話である。ここに登場する「魏の文帝」こそ、本稿の主人公、 『太平御覧』天部四・日下の条に引く『談藪』に見える逸 魏の文帝は王となった時、太陽が地に落ちて三つに分か れ、その一つを得て懐中に入れるという夢を見た。

> ことになる。本稿では、この曹丕の生涯・事績と、それをめ ば、それ以前に死んだ関羽も曹操も三国時代の人物ではない 三国時代の開始は西暦二二〇年とされることが多いが、これ する人物と位置づけていることが読み取れよう。 ぐる研究について触れてみたい。 のであり、曹丕こそが三国時代の開始を象徴する人物という は曹丕による魏王朝の創始を指標としてのこと。これに従え 現在でも、

#### 立太子まで

また、以後『三国志』からの引用は、書名を省略する)に見える。 七?)が著した史書『三国志』魏書二・文帝紀(以下、文帝紀 曹丕に関する基本情報は、 西晋の陳寿(二三三?―二九

曹丕

下同様)。 剣術に巧みで、広く読書に励んだかという自慢が続く。まる て脱出できたのだそうだ。以下、 らが戦死したとき、曹丕はわずか十歳であったが、馬に乗っ の曹昂と、 で「兄曹昂が死んだのは馬に乗れなかったからだ」と言わん いう。曹操が一度は降伏した張 繍の反撃に遭い、兄の曹昂を習い、八歳で騎射を会得し、曹操の出征に常に従軍したと 以下のように述べる(紹介する史料は、意訳と省略を行った。以 た。曹丕は、若き日の自分について、 らの後継者ではなかったからである。ここでは、 にふさわしい」と主張する必要があった。曹丕は生まれなが ばかりであるが、曹丕には「兄ではなく自分こそが父の後継 曹丕、字は子桓。後漢・霊帝の治世、中平四年(一八七) 曹操の子として、沛国譙(現在の安徽省亳州)に生まれ 董卓の暴政に始まる混乱期、曹丕は五歳から射撃 同母弟の曹植について見てみよう。 自分がいかに馬術・弓術 『典論』自叙におい 彼の異母兄

#### 丁氏と曹昂

常に密接な関係にあり、 初出二〇〇〇年)が詳述するように、 あった。石井仁『魏の武帝 曹丕の母は下夫人であるが、当初曹操の正室は丁夫人で る。曹操と丁夫人の間には子がなかったが、曹昂は実母 曹操政権にも多くの丁氏が参加して 曹操』(新人物文庫、二〇一〇年。 沛国の曹氏と丁氏は非

> 人は曹操が曹昂を死なせたことを怒って、実家に戻ってしま である。ところが建安二(一九七)年に曹昂は戦死し、 ば、曹操の後継者は丁氏という後ろ盾を得た曹昂だったはず 夫人の死後、丁夫人によって養育された。何事もなけれ こうして曹操の後継の座は、空位となった。

存在しない理由として、曹丕によって丁氏に関する史料が抹 定すべき存在だった」と指摘し、丁氏の列伝が『三国志』に 曹操の死後、曹丕によって処刑される。石井は「(曹丕が)曹 を下すのも、同様の理由があろう。 殺された可能性を指摘する。曹丕が曹昂に対し厳しめな評価 氏のあとつぎとしての正当性を主張するとき、丁氏一族は否 めとなった。この丁儀と弟の丁廙は、曹植のために尽力し、 娘を丁儀に嫁がせようとしたが、曹丕の反対によって取りや 丁氏に対する曹丕の態度は、 冷淡そのものである。

### 曹植との後嗣抗争

で言及があり、 万縄楠『魏晋南北朝史論稿』(安徽教育出版社、一九八三年)は 植であろう。彼らの後継者争いは、すでに『三国志』の段階 単なる後継争いという視点にとどまらず、 後継を巡る曹丕の最大のライバルとして知られるのは、 すなわち汝南・潁川の士大夫を中心とした世族地主集団 多くの研究者もおおむねこれに依っている。 曹操政権の二大派

文学的才能を持つ曹植を後継とするか迷ったが、最終的には 「名士」の支持を得た曹丕を太子とした、 えるべく、新たな価値基準として「文学」を宣揚し、優れた 五年)によると、曹操は儒教的価値に立脚する「名士」を抑 典中国」における文学と儒教』汲古書院、二〇一五年。初出一九九 団は儒学・長子相続を標榜して曹丕を支持し、後者が勝利し 「譙沛集団」による抗争の表面化として後継者抗争を捉え たと分析する。また渡邉義浩「曹操の「文学」宣揚」(『「古 る。万縄楠は、譙沛集団が曹植を支持したのに対し、汝潁集 「汝潁集団」と、 曹操の地縁者を中心とした新官僚地主集団 という。

曹植ら親族抑圧を誇張して書いており、その目的は後嗣争い だという。金文京『中国の歴史04 が原因で曹魏が衰えたことを強調することを通して、彼が仕 洋学報』八四―四、二〇〇三年)によると、 久「『魏志』の帝室衰亡叙述に見える陳寿の政治意識」(『東 ためにわざと乱行を重ねた可能性もあるとしている。 時代』(講談社、二〇〇五年)は、曹植が後継候補から外れる える西晋による至親輔翼体制を強く主張することにあったの 一方で、曹丕と曹植の不仲を否定する研究もある。津田資 三国志の世界 後漢三国 陳寿は曹丕による

世からも見られていた。 いずれにせよ、曹丕は兄弟に対し冷酷に臨んだ男として後 こういったイメージが増幅されたの

> 七) 年、 革命直前に覇王の後継者が独自に幕府をひらき副官になる方 され、 同書編纂時の皇帝である南朝宋の文帝(劉義隆。在位、四二四 た「七歩詩」のエピソードを伝えている。かかる曹丕像には 叱責される逸話や、 母弟の曹彰を毒殺し、 であろ 式の始まりとなったとも指摘する。 れたのかは不明という。 たが、本来の五官中郎将とは全く別で、 前掲書によると、曹丕の拝命した五官中郎将は副丞相の職と (拙著『中国知識人の三国志像』研文出版、二〇一五年も参照)。 -四五三)による皇弟迫害が投影されている側面が見出せる 建安十六(二一一)年、曹丕は五官中郎将となる。石井仁 三公や将軍と同様、府を開いて官属をおくことができ 曹丕は魏国の王太子となり、 南朝宋で編まれた『世説新語』は、曹丕が 曹植が曹丕による迫害を嘆く詩を詠じ 次いで曹植まで殺そうとして、 同時に石井は、この曹丕の事例が、 さらに建安二十二 (二) 正式に後継の座を得た なぜこの官名が使わ 同

#### 漢魏革命

同年十月、 帝に即位、 相・魏王となる。 建安二十五 (三三〇) 年、 黄初と改元する。 曹丕は許において後漢の献帝から禅譲を受け皇 建安二十五年は延康元年と改められるが、 曹操は洛陽で死に、曹丕は丞 魏王朝の創始である。

# 「五胡十六国」 史への省察を起点として

徐 冲 (板橋暁子・訳)

と赫連夏によって完成されたのである。と赫連夏によって完成されたのである。と赫連夏は、五胡十六国」の一とされるように然一ののち、赫連夏は「五胡十六国」の一とされるように然ったが、実際の鉄弗部は拓跋部と同様に、西晋時代、塞然いた国家は、塞内部族が築いたその他の五胡国家と形態築いた国家は、塞内部族が築いたその他の五胡国家と形態祭いた国家は、塞内部族が築いたその他の五胡国家と形態祭いた国家は、塞内部族が築いたその他の五胡国家と形態祭りた。北魏による華北朝方に勃興し、関中にも領土を拡張した。北魏による華北朝方に勃興し、関中にも領土を拡張した。北魏によって完成されたのである。

歴史上の一段階を構成することになった。とりわけ注目すべきは、このころ中国北部には大量の異民族(非漢人)が活動しており、彼らは多くの政権において支配階層の中核を担ったことである。一般に「五胡十六国」と呼ばれるこの時代の諸政権は、西晋の亡命人士により長江流域に耐立された東晋政権とともに、西晋時代と南北朝時代を結ぶ樹立された東晋政権ともに、西晋時代と南北朝時代を結ぶ村の中核を担ったことになった。

「皇帝」「天子」という称号を用いた。すなわち、王統上は西する政権であり、これと呼応するように、それらの統治者はとされてきた地域(関中平原と河北平原に代表される)を領有できる。ひとつは、華北において漢晋以来中国王朝の心臓部「五胡十六国」時代の諸政権は、二種類に大別することが

#### はじめに

前半にかけて、中国北部は百年以上にわたる混乱期を迎えた。短命に終わった西晋の全土統一後、四世紀初頭から五世紀

28

国とともに、この時代の負の面を象徴する典型として後世長 は、先に挙げた五胡十六国中の諸「天下政権」 晋の王統を継承した「天下政権」としての自己認識を見て取 晋から長安を奪うと皇帝に即位した。ここには明らかに、漢 有した。勃勃は当初「大夏天王」「大単于」を号したが、東 ないものであった。 ることができる。しかし、歴史上における赫連夏の位置づけ 十年の長きにわたり関中地域(現在の陝西省)にも領土を保 (現在の内モンゴル自治区オルドス地区)に勃興したが、一方で、 て位置づけられてきたとはいえ、この類型を基準にして考え 赫連勃勃が樹立した「大夏」は、「五胡十六国」の一とし 明らかに異質な性格を有している。赫連夏は朔方 西秦・南燕・北燕などが該当する。 「暴君」赫連勃勃は、早々に滅亡した夏 には遠く及ば

記憶されることになったのである。

包されてきた問題を明るみに出すことが可能になる。そし することを目指すものである。 「五胡十六国」から「北朝」に至る歴史の筋道を改めて把握 部/北魏の歴史が交錯する時期 る。本稿は、鉄弗部/赫連夏の歴史-て分類することが困難な政権、すなわち北魏の中に見出され でもなく赫連夏を通じて、伝統的な「五胡十六国」理解に内 分類することが困難な存在であり、 赫連夏は、「五胡十六国」に対する伝統的な理解に即し 問題の根源は事実上、赫連夏と同じく上記の基準に即し 実際のところ、 の整理と比較とを通じて とりわけ彼らと拓跋 我々は他

## 「五胡」と「十六国」

たのである。 政権を相次いで滅ぼし、華北統一を完成するとともに、百年 年)以後、北魏は数十年間で後燕・赫連夏・北燕・北涼等の 乱以来、長期にわたり中国北部を席巻してきた混乱を収束し 近くその状態を維持することに成功した。 もなく歴史的事実である。道武帝拓跋珪による建国(三八六 国」時代の幕引きをした政権とみなされている。これは他で 拓跋部を中心として成立した北魏は、一般に「五胡十六 いわゆる「北朝」という概念もまた、 西晋末期の永嘉の 北魏をそ

「南朝」時代に入った流れと対応している。 の筆頭とするものであり、 中国南部で劉宋が東晋に交替して

「華」と相対化された、マイナスの色合いを帯びた呼称であ かし、「五胡乱華」という語がまさしく示すように、「胡」は でいることである。「五胡」は匈奴・羯・鮮卑・氐・羌ら五つ は、彼らの自己認識に対する否定を意味しているのである。 いずれも、漢晋以来の正統を継ぐ者と自任していたにもかか (羌)等の諸政権、 趙(匈奴)・後趙(羯)・前燕/後燕(鮮卑)・前秦(氐)・後秦 華北の心臓部を相次いで領有し正統的地位を獲得した漢/前 の民族を指し、彼らによって樹立されたのは、西晋末以後に 上の観念であって、 わらず、彼らに対しあえて「五胡」という呼称を用いること ただし、注意すべきは、「五胡」と「十六国」は一種の歴史 非正統であることを意味する。これらの「天下政権」は すなわち前述の 対象となる存在への否定的意識をはらん 「天下政権」である。

胡国家がそれぞれ編纂した「国史」を基礎として撰述された 北魏が平城から洛陽に遷都した直後のことである。同書は五 崔鴻が撰した『十六国春秋』に始まる。時期的には五世紀末 それら諸政権のうち ものである、と崔鴻は自ら述べている。「国史」である以上は 「十六国」という語もまた同様である。この呼称は北魏の 「天下政権」が抱いていた自己認識もま

になって、 る。ここでいう徳運とは、王朝と五行の対応関係を指し、 九〇)年に王朝の徳運を調整した事件の帰結であるといえ 政権の地位へと彼らを貶めるものであった。 た、 領有したことを承認するものであった。ところが太和十四年 下政権」の自己認識を承認し、 趙→前燕→前秦に対応するものとされていた。そして後趙の 北魏を創始すると、 中国の歴代王朝はみなこれを重視してきた。道武帝拓跋珪は ものである。前漢後期における五徳終始説の確立以後、古代 生の順序(木→火→土→金→水→木)によって循環しつづける は、洛陽の北魏朝廷の態度を反映するものであるといえよう。 り、前述の「周縁政権」とともに「十六〝国〞」を構成する諸 かし崔鴻は、「十六国」という呼称を用いた。これは明らか る五胡国家の正統性を否定するとともに、 が自らを土徳と位置づけた行為は、北魏に先行する五胡「天 とはいえ、このような態度は、北魏孝文帝が太和十四(四 ・木徳→火徳の後を承けるものであり、これらはそれぞれ後 史家の筆法において彼らの自己認識を否定するものであ 天下を領有する「王朝」であったことが想像される。 北魏は自らの徳運を水徳に改めることで、 西晋の金徳を承けるものと考えられていた。 自らの国家を土徳と定めた。 かつ彼らが漢晋以来の天下を 西晋の金徳を直接 このような筆法 土徳は水徳 北魏 相

29

## 魏晋期の儒教

#### 古勝隆一

は、二○一七年)、『中国中古の学術』(研文出版、二○○六年)、出版、二○一七年)、『東京は中国古典学。主な訳書に井筒俊彦『老子道徳経』(慶應義塾大は中国古典学。主な訳書に井筒俊彦『老子道徳経』(慶應義塾大は中国古典学。主な訳書に井筒俊彦『老子道徳経』(慶應義塾大はがある。

の重要性は看過できない。 のできない。 のでない。 のでな

#### はじめに

持つようになるのは、前漢時代(前二〇二―後八)のことでさせ、勢力を伸張していったが、国家との関わりを本格的に孔子を祖とする儒教は、戦国時代を通じてその内容を充実

上に位置づけられる。ともあり、漢代は儒教が最も栄えた時代の一つとして学術史を重んじた。かくしてこの両漢時代(漢代)を通じ儒教と国家との結びつきは決定的となり、当時、名儒が数多く出たこ家との結びつきは決定的となり、当時、名儒が数多して儒教を国の格がに据える制あった。続く新代(八一二三)は儒教を国の根幹に据える制あった。続く新代(八一二三)は儒教を国の根幹に据える制

漢亡びて経学は衰う」と言い、同時期について「経学中衰時『経学歴史』(一九〇六年刊)などは、「経学は漢に盛んにして見方があり、今日なお影響力のある儒教史のひとつ皮錫瑞儒教はといえば、むしろ勢いの衰えたものであったとする

その一方で、三国両晋時代

(魏晋時代、二二〇一四二〇)

0)

魏晋期の儒教

代」と総括した。しかしこの時代の儒教の隆盛を勘案すれば

82

ては省略に従う。 太学や博士の制度、重要な儒者やその著作について述べるこ ととし、社会における儒教の役割や他宗教との関わりについ 展開を見せたのか、 本稿では、漢代に連なるこの時期において儒教がいかなる その概略を記す。 ただし紙幅の都合上、

## 漢代儒教を継承した三国時代以降の儒教

位前に『詩』『論語』『孝経』を学んでいた。 す深く漢朝の内部に浸透して影響を及ぼした。宣帝自身、 が、宣帝(在位、前七四~前四八)の即位以後、 (前一七九−前一○四)らが国政にも関与したことが知られる 前漢の儒者といえば、すでに紀元前二世紀の頃から、 (生没年未詳)・公孫弘(前二〇〇―前一二一)・董仲舒漢の儒者といえば、すでに紀元前二世紀の頃から、叔漢の儒者といえば、すでに紀元前二世紀の頃から、叔宗 儒教はますま 即

漢の禅譲を受けて新王朝を建てると、劉歆(?―後二三)ら 文学を批判し、 劉歆は、当時において主流であり国家の庇護も受けていた今記 の助力を得て、 その後、漢の外戚でもあった王莽(前四六-後二三)は、 古文学と呼ばれる儒学を標榜した人であるか 周の制度を理想として国家制度を設計した。 前

> 家が誕生したことの意味は大きい。 の国家は短期のうちに破綻したものの、 新代における儒教は古文学にのっとるものであった。 儒教理念に基づく国 2

た大家が出て儒教の黄金時代を築き、 七?)・馬融(七九-一六六)・鄭玄(一二七-二〇〇)といっ 施設を建設した。 が浸透した。 経典を根拠とし、 -五七)は、洛陽(後漢では雒陽と表記された)に遷都し、 さらに新が倒れたのちに後漢を建てた光武帝(在位、 後漢時代においては、許慎(五八?-一四 その地に明堂・霊台・辟雍といった礼制 また社会にも広く儒教 儒教

文学を主として今文学をも取り込んだものであった。 が優勢となり、 劉歆を祖とする古文学派も擡頭し、 との関わりが深かった今文学派であったが、 なお後漢時代における国家公認の儒教は、前漢以来、 鄭玄の学問(鄭学、鄭氏学などと称する)も古 後漢末期に至って古文学 一方で、 上述の 国家

よう。 鄭学の受容と超克とが当時の学界の課題であったともみなせ の王粛などは鄭学に反対する姿勢を鮮明にしており(後述)、 三国時代以降の儒教はその鄭学を踏まえて発達したが、

のは必然であったとも言えよう。 証拠と論理を重んじ、博学をむねとする古文学が盛んとなる 漢の滅亡とともに一気に衰えたが、一方、自由な気風を有し 流の古文学が盛んであった。漢という国家の庇護を受けて、 師から継承した内容を墨守するばかりであった今文学が、 後漢末以来の古文学優勢を受け、三国時代においても鄭玄 後

管掌したのと比較すると大いに性格が異なる。(④) 百官志上によると、魏では十九人の博士を置いたが、 が定められ、春秋穀 梁 博士(今文系)が置かれた。 魏(二二〇―二六六)においては、黄初五年(二二四)、国家 は古文学を管掌したらしく、 中心的な教育機関たる太学が立てられ、「五経課試の法」 前漢の博士がすべて今文学を その多 『宋書』

文学者を継承した学問を構築した。王粛の父は王朗(?―二 じ、『春秋左氏伝』(古文系)に注した。王朗は魏の司空にま ら鄭学を学んだが、のち異を唱え、馬融などの鄭玄以前の古 国家のみならず後世への影響力もあった。彼は幼少の頃か 魏の官僚のなかでも、王粛(一九五―二五六)の学問は、魏 重んじられた人物である。 もと今文学の教育を受けたが後に古文学に転 王粛は、 その父の『易

> であろう。 基づき経書を解釈し、さらにそれを官僚採用試験に用いたの 学官に列せられた。 『礼記』)」『春秋左氏伝』『論語』 は必ずしも明らかでないが、 みず なお、学官に列せられということの意味 からも『書』『詩』「三礼 おそらく博士がそれらの注釈に の注を書き、 (『周礼』『儀礼』 いずれも魏の

反論した。鄭玄の学問と王粛の学問、 される以外、 の優越が定まった。王粛の経典注釈は、 その後、南北朝時代においては王粛の影響力が失われ、 結局この時代には決着がつかず、 王粛が鄭学を攻撃したため、鄭玄の弟子の孫炎などがそれに 当時は鄭玄の学問を直接に継承する者が少なからず存在し 後世に伝わらなかった。 後世へと持ち越されたが、 どちらが妥当なのか、 断片的に書物に引用 鄭学

たちで、 文・篆文・隷書の三体を備えることから三体石経とも称する。 (一七二―一七八)、洛陽の太学の前に石経を立てた例がある (漢 年間(二四〇一二四九)における石経の建立である。石経とは、 の石経を立てた。これを魏石経、正始石経と称し、 石経、熹平石経などと称する)。魏では、この熹平石経を補うか 国家が儒教経典を石に刻んだものであり、 魏朝が儒教を重んじた現れのひとつが、 同じく洛陽の太学の前に『尚書』『春秋』『左氏伝』 後漢では熹平年間 魏の後期、正始 また古

83